

# 大蛇

観世小次郎作

前

ワキ 素盞鳴尊

立衆 徒者一同

シテ（翁） 手摩乳

ツレ（嫗） 足摩乳（謡なし）

後

ヒメ 稲田姫（謡なし）

ワキ 前に同じ

ツレ 徒者

シテ 大蛇（謡なし）

「始めて旅に行く雲の。 く。 治まる国を尋ねん。」

詞 「そもそも是は伊奘諾の御子素盞鳴神とは我事な

り。

ツレ 「夫れ治まれる國の始め。混沌未分に分れしより。

新羅の國に天降り。それよりやがて旅衣の。

道行 「思ひ立つ。あしたの原も遙々と。 く。 見えて漕  
がるゝ海士小船。その水馴棹さしてなほ。行くへ  
の波も八雲立つ。出雲の國に着きにけり。 く。

「ながらへて生けるを今は歎くかな。憂きは命の科  
ならず。とは思へども思ひ子の。別れを慕ふ世  
の習ひ。我等夫婦に限らめや。身は老鶴の音にた  
てゝ。泣くより外の事ぞなき。

「見るからに。袂ぞ濡るゝ桜花。

「空より外に置く露の。 く。 身は幼き緑子を。誘  
ふ嵐は風よりも。烈しき物を川上の。大蛇の為に  
失はん。子の別れをば如何にせん。 く。

「我此國に來りつゝ。四方のけしきを詠むる所に。こゝに怪しき疎屋の内に。いみじく涕哭する声有り。是は如何なる神やらん。」

シテ「我ならで訪ふ人もなき柴の戸の。明けくれ泣く音を今更に。尋ね給ふは誰やらん。」

ワキ「誰とも知らじ久堅の。天より降る神なるが。此国始めて見そなはし。こゝに尋ねて來りたり。」

シテ「そもそも天より降ります。神とは何と木綿四手の。」

ワキ「斯かる泣く音は羽束師の。もりける事よ如何にせん。」

シテ「何をか包み給ふらん。早々姿を顕はして。謂を語り給ふべし。」

シテ「仰せにしたがひ夫婦ともに。歎きを止めて柴の戸を。」

地「おし明方の雲間より。く。神代の月の影清く。尊の御姿。あら有難のけしきやな。かくて夫婦の

老人。中に少女をすゑおき。歎き悲しむ有様の。心もとなきけしきかな。く。

「如何に夫婦の老人。我は是れ伊奘諾伊奘冊の第四の御子素盞鳴の神なり。されども如何なる故にや御憎まれを蒙り。既に根の国とこの国に趣く。いまし達は如何なる神ぞ。少女を撫でゝ啼哭する事。そもそも何の歎きぞや。

シテ「其時答へて申さく。やつがれは是れ此国津神なり。

地「名は手摩乳。妻の名は脚摩乳と申す夫婦なり。

サシ「然るに此乙女は是れ我子なり。名をば櫛稻田姫と申す。

地「かやうに歎く其故は。先に我子八人の乙女あり。年毎に簸の川上の大蛇に呑まれ。今又此姫取られんとす。免るゝによしなしと言ふ。

クセ「其時素盞鳴。詔して宣はく。實に理や老人の。歎く心を憐びの。恵みぞ深き川上の。大蛇を従へ。

治まる國となすべし。少女を我にたび給へと。宣  
へば老人は。喜悅の色をなし給ふ。

シテ  
「すなはち乙女を奉る。

地「やがて尊は稻田姫の。湯津の爪櫛取りなして。鬢  
づらにさし給ふ。其まゝ治まる國津神。こゝに宮  
居の二柱。立つや八雲の妻共に。八重垣造る言の  
葉の。三十一文字の詠歌の始めなるべし。

ロンギ地「實に有難き詔。く。さてや大蛇を従へん。其御

方便如何ならん。

ワキ「畜類の。心も兼ねて白真弓。八しほりの酒を取り  
合はせ。さすき八間を結ひおき。酒船に酒をたゝ  
へん。

地「さてや八艘の酒舟を。簸の川上に浮べつゝ。

ワキ「乙女の姿うつさんと。

地「夕べの雲の波。煙も立つや簸の川上に。稻田姫を  
伴ひ。上らせ給ふ有難や。く。(中入)

「光散る。玉の御輿を先立てゝ。尊は馬上に威儀をなし。簸の川上にと急ぎけり。

ワキ「そもそも是れは。伊奘諾伊奘冊の御子。素盞鳴の神なり。簸の川上の大蛇を従へ。国土豊になすべきなり。

地「八雲立つ。出雲八重垣妻ともに。く。鳥上の嶽

にうち上り。簸の川上は是なれや。山聳え岸高く。嵐も波も声々に。物すさましき川岸に。稻田姫を一人すゑ奉り。波間に浮べる酒船に。御影をうつし給へば。尊は馬より下り立ちて。岸に上つてひそかに。出づる大蛇を待ち居たり。く。

地「川風暗く水渦まき。く。雲は地に落ち波立ち上り。山河も崩れ鳴動して。顕はれ出づる大蛇の勢。年ふる角には雲霧かゝり。松柏そびらに生ひ伏して。眼はさながらあかゞちの。光を放ち角を振りたて。さも恐ろしき勢なれども。さすが心は畜類

の。舟にうつろふ御影を呑まんと。頭を舟に落し入れて。酔ひ伏したるこそ恐ろしけれ。

ワキ  
「尊は十握の神剣を抜き持ち。

地  
「尊は十握の神剣を抜き持ち。遙の岸より下り給へば。大蛇は驚き怒りをなせども。毒酒に酔ひ伏しこそ恐ろしけれ。」  
通力失せて。山河に身を投げ漂ひめぐるを。神剣を振り上げ斬り給へば。斬られて其尾は雲を突ち。尊を巻かんと覆へば飛び違ひ。巻き付けば斬り払ひ。めぐればめぐる互の勢ひ。神は威光の力を顯はし。大蛇を斬り伏せ忽ちに。其尾に有りし剣を取つて。叢雲の剣とは名づけたり。